

備振興会・盛岡身体障害者協議会

全抑協活動 岩手県慰霊事業実行委員

現住所 岩手県盛岡市桜台

家族 妻、長男

(岩手県 田辺 壮久)

無題

栃木県 橋本 正男

1 ①新潟県中魚沼郡上郷村宮野原

村立宮野原尋常高等小学校高等科

昭和三(一九二八)年三月二十五日卒業

卒業後は出生地にて農業に従事

②家族は、父 母 長兄 次兄 姉 弟 妹  
弟 弟と十人

長兄は家を出て建設会社に勤務する

次兄は現役にて北朝鮮会寧にあつて工兵

姉は部落内の農家に嫁す

弟は志願して北朝鮮の騎兵隊に入隊

妹と弟二人は学校に通っていた

2 ①昭和十六年七月十五日、赤紙にて高田歩兵三

〇連隊に集合し、三日ほどして大阪より朝鮮

釜山を経て羅南歩兵七六連隊補充隊へ入隊。

服装は演習用のものであったが小銃だけは新品で渡されたガーゼを巻いて乗船した。途中釜山にて三泊の後羅南に向かう。

②北朝鮮羅南の歩兵七六連隊第二中隊にて訓練をうけ、第一期検閲をうけてからソビエト連邦の見える甑山峯の半地下兵舎にて警備に任ずる。

この土地には七四八一部隊の歩兵砲兵が各一個中隊で警備を行っており、我々の行った時は未完成の陣地であったので訓練よりも警備と陣地構築が主なる任務であった。

3 ①八月八日夜半に、程近い羅津要塞を爆撃のため我々の兵舎上空を口助の飛行機と思われるものがひっきりなしに往復し、羅津では爆撃の火柱が上り高射砲の曳光弾が射ち上げられるのであるが敵機までは届かないようであった。従って弾に当たって落下する飛行機は一機も見なかった。

②国境警備に任ずる我が中隊は、常に戦時態勢であるため格別の命令はなくとも展望哨や前線に対する動哨は常に出して警戒をしておいた。

八月九日に私は陣地前方へ潜伏斥候に出でたが、夜十二時に遠くで我々を呼ぶ声があり次第に潜伏現場に近づくので誰と誰何<sup>すいか</sup>せるところ水谷軍曹が我々に引き上げの伝令に來たのであった。我々は直ちに弾抜けをして彼の後に従って帰營したのであるが、帰營の復唱もせぬまま私物を整理して舎外に整列し新たに弾薬、ダイナマイト、手りゆう弾を持てるだけ各人に携行させて出発した。勿論米は二升位持たされて銃は当然持って居るので重い事、行軍はできなくなる程持って出発であるが、行先と目的を知らされぬまま出発し、途中初年兵の携行品も分担して持って行軍である。

行軍は昼間はソ軍飛行機からの攻撃あり夜間だけの行軍となった。民間人も同じ道路を通つての逃避行であり、鍋釜を携行し子供の手を引いての行動は気の毒としか言う事はできなかった。我々とどこに行くのかは下級の兵士には分からないのである。足から血を流しながら歩き続ける幼子の姿を見ると自分達の家族でなくて良かったと誰もが思ったこの事である。

出発してから幾日か経て我が中隊より後衛尖兵が一個小隊出る事になり、我が分隊もこれに加わり健康な兵のみを連れて元山洞部落に仮宿舎を定めて上村分隊長は兵五人を連れて敵状偵察に出発し、残る者は敵襲に備えて万全の備えを整えつつ待機する事三日ほどして本隊より迎えに来た。

4 ①本隊よりの迎えに来たトラック隊長もただ状況が変わったから直ちに全員引き上げよと伝達

するだけで後は何をきいても分からんとて話にならず設営の道具も一まとめにして全員トラックにて引き上げた。

着いた所は三合村と言う部落にある学校の校庭であつた。早速携帯武器弾薬を校庭の焚火の中に放り込まれたが、入隊以来守り抜いた小銃とお別れとなつたが、今頃になって武器が出たのではソ軍に疑惑を大きくするだけなので申告できないとの話であつたが、我々には詳しい説明もなくただ状況が変わつて明日から日本へ帰るのだとの事であつた。八日未明より八月十八日に至る間は訳が分からず慌だしい毎日で何がどうなっているのやらサツパリ分からない毎日であつた

②二晩位校舎で泊ると全員が河原に集合させられ日本へ帰るに当たり怪我をしてお互に困るからとて薬品類と刃物、時計、鏡、ノート等、口助の無い物を全部欲しいので彼らの物欲を満すだけの私物検査で一週間に一回位や

らせられたのである。我々の持物は目ぼしい物は全部取り上げられたのである。終わって校舎（宿舎）へ帰って二日ほどして、いよいよダモイに向けて出発するので持てる物は全部持てとの指令があり、冬に備えてかつ体力のある内なので持てる限り沢山の荷物を持ったが、暑い日盛りに重い物を持ったのであるが彼らのダバイに急かされて落伍者が出る始末であるが、彼ら歩哨は落伍者は射殺するとの違いがあり我々も仕方なく重い冬衣料を捨ててようやく歩いて歩くのであった。厩大な荷物の運搬に一役買わされただけで目的地に着いた時には身体だけであった。

③我々は一年程軍隊の編成であって使役や作業命令も軍隊調であった。

④朝夕の点呼は整列はなかったが編成のまま点呼も命令も行われていった。

⑤現地人との接触はなかったが北朝鮮富寧に収容されておった頃は毎月二回位舎外に整列し

て私物検査をうけ時計、万年筆、鏡等光る物を略奪を欲しいままにし、拒否すればマンドリンにて脅かすのであって始末の悪い歩哨達であった。

5①武装解除は北満の三合村にて行われその後は羊のごとく追い廻される毎日であった。

②監視兵は朝から晩までダバイ、東京ダモイを繰返す毎日なので誰も信用はしませんが銃口を向けられる毎日なので従わざるを得なかった。富寧から洪儀駅へ下車、四年間守備しておった甑山峯の兵舎跡を見ながら銃剣に追われながら豆満江に新しくできた木橋を渡りソ連軍のトーチカ陣地を背後より見ながら、ひたすら歩き続け駅名も分からない所から上下二段の貨車に乗り三日進んで一日位は戻り、どこに向うのか、ただ東京ダモイを繰返すばかりの返事であったが、四日目頃名もない駅らしき所で下車、銃口に追われて人里離れた平地

に野宿をした。監視の歩哨はどこかに遊びに行ったらしい。夜中に近くの民家の住人らしき者に命から二番目位に大切に居った飯盒と衣類を強奪された兵があり、軍隊も民間人も泥棒大国の人々である事を痛感し夜も昼も油断ができない国である事を全員肝に銘じた。

その頃我々は行軍中に水を呑む者多くて下痢患者が多く隊列から遅れる度に銃口に脅かされながら歩く毎日であった。

5③昭和二十一年五月頃乗車の地名も下車地点の地名も全部分からない。

6①我々は千人単位の団体で行動し人跡未踏の原始林に連行されたので地名も細かくは分からず後日分かったのはウオロシローフ地区のミハイロフカの近くとの事でそれ以外は何も分からない。

道路工事のために、ある程度できると前進す

るのでその土地に定着しないのである。大体一年に三回ほど移動して宿舎を建てるので地名の分かりようがない。

②虱は俘虜にはつきもので、秋から冬を越し春までは洗濯をしないので誰もが虱に悩まされた。昭和二十二年頃の冬には二回位巡回バスのような車が来て交代で十人位宛シャワーを浴びた。凍らない程度の水のために寒くて風邪を引くようであるが、少しの水でも垢を落とすだけでも気持が良かったのと、その間に着衣は別の車にて滅菌消毒をするので終わると三日位は気持が良かったのであるが、四日も経つと元の木阿弥であった。

我々は夜ドラム缶を横にしたペーチカを使用し夜中も火を絶やす事がなかったので自分の着て居る襦袢と袴下は飯盒にて雪を溶かしてその中に交互に入れて煮立てて虱の卵まで殺して、すぐ水もないのでそのまま乾かして着ておいたので常に下着類は雑布のような色

であった。

ある年の冬の寒い日遠くから水を運んで来てドラム缶にて沸かして入浴した事があった。初めの二、三人（ソ連）の監視兵の入る頃は何とか湯もあるが十人以上も入るようになると湯も少なくなつて肩まで入る事ができなくなるので、それ以後入る人は二人抱き合わせで入らないと肩まで湯がなくなるのであった。皆全員やせているのでちよいど良い工合に肩まで湯に浸る事ができた。だが周りに居る入浴当番の者は近くの吹溜りから雪を集めて補充したり薪を追加して火を焚かねばならないし、水は井戸にはあるようであったが釣瓶は炊事係だけしか持つておらず、零下四〇度も下る地方なので釣瓶の縄が凍ると折れて井戸の中に落ちてしまうので炊事係は貸してはくれないのであった。仕方なく砂まじりの雪を集めて湯の補充をするのである。

我々の寝る所だけは半地下の宿泊所を作つて

も、入浴場の囲いなどは作る時間がないために止むを得ない方法であった。

そのような風呂でも少しは垢が落ちるので三日位は気持が良かった。このような風呂もその冬に三回位は入つたような気がする。夜が明けると残り少ない湯は凍つているのを捨てて二人でドラム缶を持参し近くの川から水を汲んで湯を沸かして昼食時には全員その湯を飲んで腹を満たしたのであるが、誰も腹痛を起さないようであった。

6③ 一棟の建物には二十〜三十人位入つており千人単位の者が近くにおつた筈である。

7① 労役には種々雑多な仕事があり、我々は未開の土地へ軍用道路を開拓するのが主なる目的であった。

測量をするのではなく指揮官の気の向くままの道作りなので一週間程工事をやっても気持がかわればやり直しをするのであったが、指

揮官の思う方角へ向かって二十メートル幅に伐採し中央に十メートル幅の道を造成するので両側五メートル幅には伐採した用材を積み上げておき、後日道路が出来上がってから搬出するのであった。

伐採は直径一メートルを超える立木が多く二メートルの鋸は二人用で刃もそのように仕立ててあり大体地上五十センチから一メートル位の高さの部分で伐採するのであるが、その木の傾斜度や風向を考えながら切るのであるが間違つて思わぬ方向へ倒れる事があり、時折怪我人が出る事があつた。丸太は長さ四メートルに切るのであるが木株や枝が妨げとなつて丸太の搬出が思うようにできず困難を極めた。

木株を取り払うのは手作業だけでは駄目なので主として日本軍より没収した黄色火薬を根本の穴に充填して爆破するのであるが、この爆破とて安全ではなく退避場所が近過ぎる

か火を点火する係が何かの都合にて少し遅くなった時には至近距離に爆破の木株や土砂が身体に降り注ぐ事もあつて、やせ衰えた我々には敏捷に退避する事などできる訳がなく点火役は命がけで仕事をおつた。

木株を爆破すると次に手作業にて残りの木株の滓を取除き、表土の厚さ三十センチメートルほどを除外して十メートル幅になつたところでグレーダーにて側溝を造り八メートル幅に敷砂利を施行するのであるが。砂利が足りない時には木口三センチメートル位の丸太を敷詰めるのであつた。

その丸太も長さ五メートル位のものを交互に敷いてトラックを通すのであるが、乱暴な車の使い方をしておつた。

昭和二十三年の一月頃から道路の修理らしく既設道路の穴のある付近へ連れて行かれ、道路側溝の下を一メートル位掘り下げると全部砂利になつており、その砂利を各人二・七平

方メートルに採取しなくてはならないのである。

その場所は地形から言うと扇状地と言って太古の昔高い山から流れ出した土砂があたり一面に拡散して沈積したものであり、その砂利の上に厚さ一メートル近くの火山灰が堆積したのであった。我々は一メートルの凍土を金棒とつるはしとで穴を開け徐々に穴を拡げて砂利を取り出して道路の端に一人二・七立方メートルだから断面積一平方メートルの砂利山を二・七メートルに積み上げるのであるが、シベリアの大平原は吹きさらしのために寒い事はおびただしい限りであったので、弱い者は近くより枯草を集めて焚火をして歩哨の機嫌とりをするだけで重労働はやらせなかった。彼らも暖かい火当たりをしていれば夕方の検査も手心が加えられてノルマは軽くなるのである。全員大助かりであった。

中にはどのような計算で二・七立方メートル

を算出するのか大変に疑問を感じてくる者もいたが、我々はその疑問に答えるべく入れかわり立ちかわり体を休めつつ説明をするのであるが、元来掛算の頭のない者ばかりなので一日掛かりで教えても翌日には全部忘れて来るので毎日同じ事を教えるのであるが時には教える側も教わる者もくたびれて昼寝をしてお互が体を休めて何とか体力を維持できたのである。

俘虜になって早々、特技者は申し出よとの事であったが、彼らは毎日のように東京ダモイを叫ぶので、特技があるために帰国が遅くなつてはつまらないので誰一人として申出する者もなかったが、同僚の諸橋東一さんから話がありトランク造りを頼まれ、お前弟子になつてくれぬかとの相談があった。ソ連の鋸は二メートルの二人用の物だから一人では使えないので手伝ってくれとの事で私は渡りに舟とばかりに手伝ったところ、ソ連側の期待し

た以上の見事なトランクができたので、彼ら将校連は外仕事はせず屋内にてやれとの指示が出た。私達は山へ入って枯木の素性の良いものを見つけて来て適当な長さに切り、縦鋸がないのでタポールにて毎日板削りをやり、大体の厚みになったところで切味の悪い鉋にて仕上げ組立てるには金釘がないので白樺の木を割って乾燥させてから釘に仕上げて要所要所に打ち込んだので釘の色も分らずとも良く見えたのであろうオーチンハラショーと私までも褒められて楽をしたのと、我々は年に三回位移転してドームを作るので棟梁は諸橋さんがやってくれたので我々も手順を覚えて大変に早くできるようになったのだ。あるとき昼食後、今からここを引き払ってこの先何キロかどこへ行くかも分からぬが出発し、日暮れになったのでこの場所に宿舎を造れとの命令であったので仕方なく運んで来た松の皮やら藤づる等の材料を大至急で集め、

近くの山に分け入って柱材タルキ材を切る者運ぶ者等に手分けして日の落ちる頃ようやく穴を掘って柱を立てて桁を乗せて両側からタルキを立てかけるのであるが、藤づるが暗くなつては見つからず簡単な縛り方をしたために倒れてしまったので最初からやり直しをしたのであったが、二回目の建方からは専ら諸橋さんの指示通りにやったので明け方近くには完成、休む間もなく作業に追い出され夕方帰ってから手直しに忙がしい日が四、五日続くのであるから、宿舎とは言えまともな設備など何もできる時間がないのであった。

7  
②ノルマはある事になってはいるようであったが、能率の上がる時には終わる頃になって重くしてくるので、彼らのその日の機嫌次第で決して終わったからとて早く帰る等させなかつた。

③朝渡されたノルマを夕方になるも終わらぬ時には、暗くなるまでやらされるのであるが、

我々としてできないノルマの時には朝からノロノロとやって体力を失う事がないように気を配ってやった。

④ノルマを達成するべく彼らソ軍は掛声をかけるが、何らの見返りもないのと東京ダモイのウソばかりのため誰も真面目に働く者もいず、体力の消耗を防ぐつもりで極力怠ける事に精を出した。

⑤数理に暗いソ連の歩哨ゆえ現場に到着と共に冬は火当たり時間に時間をかけ、日中は彼らの目をさけて山林に入って野草取りやら秋には茸取りに精を出し、十人中二人位はいなくても分からないようであるし、彼らも点呼をやるのではないので、二人の者は便所から帰ったような顔をして時間まで皆と一緒に作業をしており、数える事のできない歩哨はそのようにして弱い者は皆でかばい合っておった。

8 ①労役に就く基準はあるとは思ったが我々には

分ならず、重労働を基準としており身体検査によって決定したのでそれに従う以外に方法はなかった。

②高熱になった以外ほとんど休む事は許される事はなく、ひたすら仕事に追い出されておった。

③労役に堪えられぬ者は入院をする以外にはほとんど認められないので我々は仲間同士で助け合った。

④健康管理は、夏は野草取りと洗濯をするのであるが石けん等はなく飯盒にて下着を交互に煮て乾かす等であった。

冬季野草がないので松葉を各自二十本宛を一日に食べるとのお達しでそれに従って壊血病を防いだ。

⑤朝夕の点呼はベッドに就いたまま員数を確かめるだけである。

作業場の往復は初めのうちは嚴重であったが、数のできない兵隊なので時間ばかりかかって、

我々も寒さに堪えられないので一カ月位で當門の出入りはずさんになった。

⑥我々は着のみ着替えなしなのであるが、冬季日本軍の防寒外套又はソ連のシューバーと言う外套を渡され、防寒大手袋に軍手と足には防寒長靴（フェルト製）とパラチンキと称する首に巻くマフラーくらいで厚い布で靴下なしである。湿らない限り温かかった。

#### ⑦食事類

一日の食事は三百五十カロリーとは聞いた事があるものの秤も杓も見た事なしで、長さを量るのはスコップが一メートル、二人引き鋸が二メートルで、あとははかりらしきものがないので少ないと思っても反論のしようがなく毎日水分の多いお粥ばかりで昼食は現在我々の食べている四つ切りパンを一枚位の黒パンを一個持参するだけであった。量は、支給通りにくればよいが彼らソ側で搾取して横流しを公然とやっている所以我々に支給され

たのは三百カロリー以下と思われる。五日ごとの糧秣受領の時には我々の糧秣は公然とピンハネをされてくるので真実は分からないのであるが、何事も良い加減の計量方法なのでただピンハネの少ない事を祈るだけであった。

⑧日曜日は休日であるが一カ月二回位は使役があつて休養はできなかつた。

碁や将棋等の娯楽は何もなく、休日ひたすら休む事を心掛けて暮らす。

⑨住居の施設は入口があるだけで途中の換気の設備等何もなし。ただベッドになるごとく細丸太を並べて枯草を敷いただけである。我々は皆が横になって寝るだけであつた。イワシを並べたようである。

⑩昭和二十二年末頃アクチーブと言う人達がどこかで赤い教育をうけて来て専門に赤化教育を始めたが、最初は誰一人信じなかつたのであるが、民主化が遅くなると東京ダモイの見込みがないとの宣伝であつて、我々もダモイ

を遅らせられてはたまらないと考え直し、同年兵が相はかって帰国までの赤い人になろうとて申し合わせて、アクチーブの叫ぶ事に相槌を打って夜の集会やら新聞の輪読会にも出席しアクチーブの叫ぶ声に調子を合せておつたが、やる事が段々エスカレートして、上官はその頃どこかへ集められたようであつたが曹長以下を反軍闘争として吊し上げ軍曹及び伍長になるに及んだのであるが、考えて見ると自分を吊し上げの順番が来てしまつたので余りにも馬鹿々々しいので夜の集会にも欠席し何もかも馬鹿々々しいので発言しないでおつたところ、日和見主義者のレットルを貼られ、間もなく追放同様に帰国者の仲間に入られて同僚より一カ月位も早く帰国した。

⑩ 収容所はアクチーブが来てから追々自主管理の形になってきてソ連側もやかましい事は言わなくなった。

⑪ 懲罰はお互にかばい合つたので何もなかった。

9 ① 私は抑留中を振り返って見て、我々の部隊はまとまって入ソしたので各人が気持ちの通ずる者ばかりである事と、我々古参兵が主として何事も主導権を握り弱者を助けてお互いが働かない事を心掛けて体をいたわつたのが良かったと思う。アクチーブが来てからは少作業は楽になったが我々も工夫をして更に働かないように心掛けた。

② 死の淵に立たされたような状況ではあつたが、我々の後年次兵の中には更に弱い者が多く加わつておつたのであるが、話をきいて見ると殆んど一家の大黒柱であつて家に帰れば家族何人かが死なずに暮らせるとの話を書けば可哀相でシベリアで死なせてはならないと励まし合つて仕事は怠けたのが良かったと思う。食料がなくてやせている者は仕事を怠ける以外に体力を温存する方法はないと悟つた。

③ 考えたり体を動かす事で労力を使う事は一切考えず何もしなかつた。

10 ①我々は部落と離れて転々と山中を歩くので  
帰還の知らせはどこか分からない。

②ナホトカまでの道程不明。

③帰還乗船のために集まったナホトカでは食料も良く心にもなく集ってはスターリン万歳を唱和すれば良くひたすら帰りたいので何か決議文があったようだが、我々はただ賛成と異議なしの道具なので大声で怒鳴るだけで、午前十と午後二回ずつ怒鳴ったので赤く染まった事になったらしく帰れた。

④信洋丸ではアクチーブが二人宛て二組位自己批判をさせられており、海へ投げ込めとて大分荒れており船長のとりなしにて助かったようであった。舞鶴へ上陸したらば同年兵の黒島新太郎氏が一船早く上陸したとの事で懐かしさの余り話をしたところアクチーブ二人を海に投げ込んだとの事であった。

⑤昭和二十三年十月二日、信洋丸であった。

11 ①農家の出身で農業後継者でないので、一週間位休んで土工に歩いたが他には赤い教育を受けた者の就職などはなかった。

②新潟は豪雪地で仕事がないので栃木県に現地除隊した兄を頼って出奔し、いろいろの仕事をしたが栃木県土木出張所に勤務し建築士の資格を取って開業し現在に至る。

諸橋東一さんには大工の事をいろいろと教わり大助りをしたので、心の中では常に感謝をしている。

同年兵の中でも上村様には彼の判断の確実さは軍隊中も抑留中も常に正しい道すじをつけて貰ったのが幸していると思う。

#### 【執筆者の紹介】

大正八年三月二十九日 新潟県中魚沼郡津南町上郷宮野原に生まれる

昭和三年三月二十五日 村立宮野原尋常高等小学

校高等科卒

卒業後は親元で農業に従事

昭和十六年七月十五日

召集により高田三〇連隊を經由して、北朝鮮羅南歩兵七六連隊にて一期の教育を終了し、日・満・ソの近接する国境警備の任務に服する

昭和二十年八月九日

ソ連参戦により直ちに戦線に加わる

昭和二十年八月十五日

終戦によりソ軍の指揮下に入る

昭和二十一年五月半ば頃

シベリアにおいて労働に従事

昭和二十三年十月二日

舞鶴上陸復員

昭和二十五年八月頃より

栃木県那須郡西那須野町三島に住所を定むる

昭和五十三年

栃木県土木事務所に勤務する傍ら二級建築士の資格を得ると共に土地家屋調査士の資格も取得す

昭和三十七年

土木事務所を退職し独立した自営業を営み今日に至る

(栃木県 野沢 芳夫)